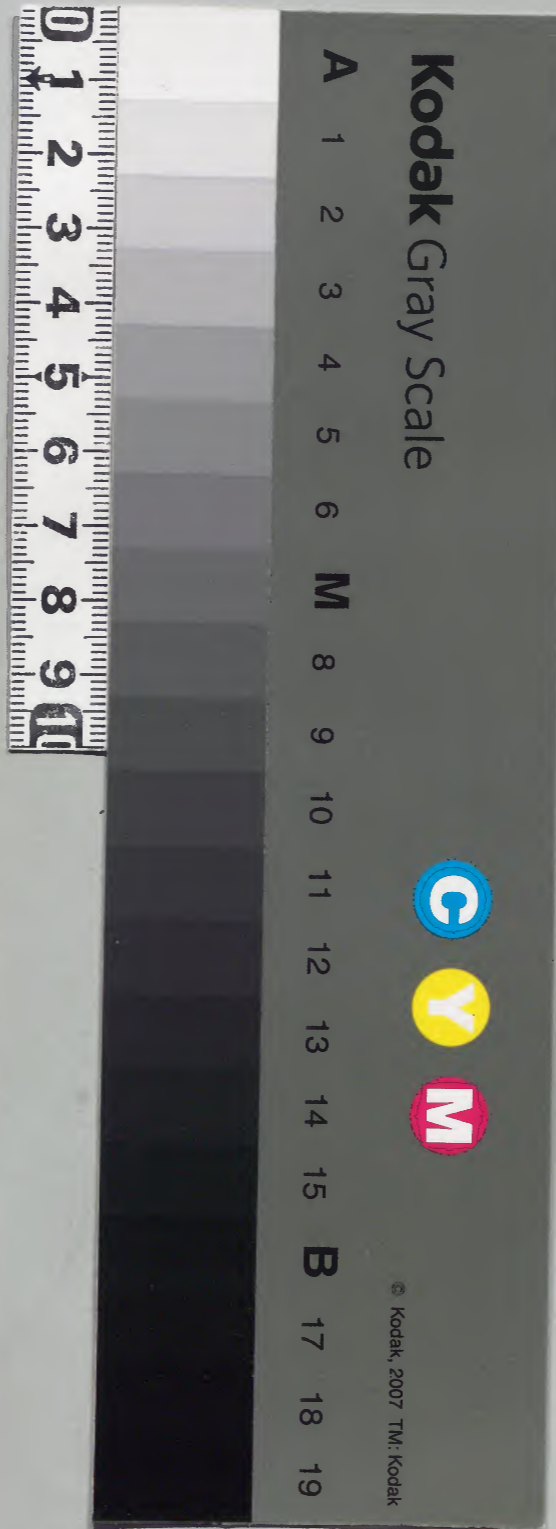


日本書紀傳 卅一卷八

初書
一〇五二二號

百三十一

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (139)
函號	特 85 1



高野宮
中央庫

圖書
文部省

是後高皇產靈尊更會諸神選

給ひ其喪屋を斫仆し給へむ其天稚彦神
の屍も何も共小蹶離ち遣はせ給ひけむ事申すも更
ふり此生を以て死小易へ〜と謂れ〜と甚
可畏し御事ありけれ一條大閻御説小死生之道相隔
に宣へり小就し通證以人誤入哀戚之過尔不可不知
顔之肖誤之者世或有之故為其縁也云れたるは實
小然る言る然る小白井宗因説小惡以生誤死謂此
犯罪人也古事記何吾比穢死人耶是也と云は甚
小謬解と云べし然る時ハ犯罪人小似るを忘て其他
ハ惡やと爲る少や且古事記あるハ死人たる小依
て穢と宣へり小ハ非るを甚強たる説共あり
惡り一事を云ふハ非るを甚強たる説共あり

内一二六八三號

日本書紀傳三十一

四百三十一

當遣於葦原中國者僉曰磐裂
磐裂此云根裂神之子磐筒男
以鞞姿婁
磐筒女所生子經津經津此
主神是將佳也時有天石窟所
住神稜威雄走神之子甕速日

神甕速日神之子燐速日神燐
速日神之子武甕槌神此神進
曰豈唯經津主神獨為丈夫而
吾非丈夫者哉其辭氣慷慨故
以即配經津主神令平葦原中

國

是後云事ハ一も天神の反天の御事を行ハせ御在
 一坐け後より彼殞歟の如きハ本より天神の拘
 せ給ふ可と御事ハ非レバ其事の終るを待せ給ふ可
 きハ非る事申すも更より已上 百二十 小注るが如
 く天稚彦を征伐の御使と爲り天降させ給へると天
 總日命父子二神の巡察の事終て還上させ給へると
 引替りたる事ハ一在けれバ今ハ其神の復命一給へ
 るより天神も此國土の消息を委曲ハ所知食させ

給へるが故ハ其神の奏請せ給へる隨ハ此ハ經津主
 神武甕槌神を天降させ給ふ御政ハ至れり然
 るハ其神の御在り坐ざり一程ハ天稚彦を天降され
 たりハ能ハ此國の事態をハ明らめさせ給はざり
 一故ハ却りてハ物損ひと成て可惜壯士神を空しく
 亡ひつるが如キ其天總日命の見明らめ給へる狀ハ
 出雲神賀詞ハ天總日命 國體見 遣時 天能 八重
 雲 押別 天翔國翔 天下 見廻 返事申給 久豊
 葦原 水穗國 畫波 如五月蠅水沸 夜波 如火竟光
 神在利石根木立青水沫 事問 荒國在 利然 鎮平

天皇御孫命ふ安國止平久所知坐之米申氏巳命兒天
夷鳥命ふ布都怒志命平副天天降遣天荒布神等平撥
平氣國作之大神平媚鎮天大八島國現事顯事令事避
支と有て其子天夷鳥命小此の二神を副て天降遣
ハさらしも其治の給ふ道有る事を聞えさせ給へ
り其荒布神等と有ハ此始小彼國多有螢火光神及蠅
色邪神復有草木能言語と有る是少く第一書小謂
ゆる殘賊強暴横惡之神と云者あり此ハ討て平げ
せ給ふ可了國作之大神上下三小注るが如く其御
功の天小して始より此國土をハ天神御子小奉りせ

給ふ御事小於て辭せ給ふ御心御在小坐はりけれ
ハ此ハ媚鎮せて現事顯事を避り奉り神事幽事を
ハ知小の奉り可くと計り申せり少く天總日命の
至誠至忠天地小貫ぬると終小其神策を奉りれ如
く成就へり者ありけり此即天推彦の如く一向小
て荒振神の中より天探女云ふ妖物の出來れり却り
爲小却りて其身を亡る一永く忠ありり汚名を
傳ふるのもあらず天神の御爲小國神の爲小果
ハ成すと事を甚能し明めさせ給へり御所
爲あり者あり其大己貴神小天總日命の始より媚附り
御在一坐上小次小降り武三熊之大入亦名天
夷鳥命小降り御在一坐て父子二柱小和一鎮の

せ給へれば豫め國避の御契約ハ粗定れけ敷然
る小右の荒振神ハ大己貴神少もハ從奉り
其御治の仰奉り居たりけれ其神の國と避給へ
むハ復國作の始ハ立返る如くして天神御子の
御勢ハ申せも容易く治給ひ得る御事ハ
御在坐さるが上ハ今此ハ大己貴神の國と避給
ふと云ハ又防ぎ拒む神共の起る可も萌も有て其
神の御心も任せ給へる事ありけり此ハ荒振
神ハ格別あり事ハ在れども己ハ此ハ經津主
神武甕槌神の天降りせ給へる所ハ問大己貴神曰高

皇產靈尊欲降皇孫君臨此地故先遣我二神驅除平定
汝意何如當須避不時大己貴神對曰當問我子然後將
報云又古事記ハ故ハ問其大國主神今汝子事代主
神如此白訖亦有可白子乎於是亦白云亦我子有建御
名神除此者無也と有て此等ハ善神の列ハ在れど
も天神御使より直ハ問せ給ふ可き由を申給へり況
てハ其荒振神と云類ハ至りてハ云へる限ハ非り
事と曉る可きあり故第二ニ書ハ乃薦岐神於二神曰
是當代我而奉從也と有て次ハ故經津主神以岐神爲
郷導周流削平有逆命者即加斬戮と所見ハ右ハ

謂ゆる神賀詞の荒^留布神等^平撥^平氣^{と云る是あり}此^事
小カを入て見ざるが故小大己貴神と申せども天神
小歸順ひ奉るなり以前小荒振神の列あり^狀
小説奉る邪説共多くて然して神賀詞小天夷鳥命
見小堪ざる事共あり^{然して}神賀詞小天夷鳥命
布都怒志命^平副^天天降遣^天と有て武甕槌神の御
名^を略くれ古事記小天鳥船神副建御雷神而遣
と有て其小經津主神の御名を漏して傳られたれ
ども彼迂却崇神祭詞小是以天津神能^能御言以^氏更量
給^氏經津主命健雷命二柱神等^平天降給^氏と有て御
紀すりも古く二神を降し給ひ^と云る傳有り若て
此小經津主神武甕槌神の出自を^とへ小殊更小記

させ給へるハ甚詳なり^{ある}傳説あり然れども右の
天夷鳥命天鳥船神小當る神の此小漏たる狀か
る小其ハ下小使者穗背脛と有ハ天神よりの使者か
る由小共小降坐^とハ書されずして別小使者を
外小天降し給ふと云節非りければ此小一列あり在
り^し事と思はせ給へる文の巧み其愛た^し此即天
夷鳥命の亦名あり上小謂ゆる大背飯王能^と大人小
て渡らせ給へる由ハ上^{百十}小己小注るが如し若て
此第一二書小ハ復遣武甕槌神及經津主神先行驅除
と有ハ其前後の次序違へる者あり其ハ第二二書小

天神遣經津主神武甕槌神使平定葦原中國と有て下
小是時齋主神号齋之大人此神今在平東國楸取之地
也と見えたり此齋主神と申すハ經津主神少く渡り
せ給ふ由春日祭詞ハ依て明らかり然し征戰の
事小望もて其大將軍たる人齋主と爲て忌氣を置て
其祭祀の事を執行ひて征伐ハ向ふ古法なる事傳卅
三由ハ小至りて説べしが如し然る時ハ武甕槌神ハ
此少くハ副將軍の狀少く御在ハ坐す事此下ハ故以
即配經津主神令平葦原中國と有て以明らる奉る可
き者分りり記傳及神壽詞ハ此二神を以て同神
異名の如く小説を合さしなれども此

二柱の出自各異小御在ハ坐す右の如き由緒御在ハ
坐せハ強て一神とハ約の難き事傳十卷ハ委しく注
せり如し 借此小經津主神の御事を載せし次ハ時有天
石窟所住神稜威雄走神之子云武甕槌神と書され
古事記ハ坐天安河之上之天石屋名伊都之尾羽張
神是可遣若亦非此神者其神之子建御雷之男神此何
應遣且其天尾張神者逆塞上天安河之水而塞道居故
佗神不得行故別遣天迦久神可問詞故ハ使天迦久神問
天尾羽張神之時答曰恐之仕奉然於此道者僕子建御
雷神可遣乃貢進と見えたり此二傳ハ就て疑ハハ
事有り然らハ其稜威雄走神と聞えさすハ四神出

生音第六ニ書小遂拔所帶十握劍斬軻遇突智爲三段
此各化成神也と見えたりと古事記ハ其文を結び
て故所斬之刀名謂天之尾羽張亦名謂^{伊都}稜威之尾羽張
こ有が如く伊弉諾大神の御劍の名なり然る小其二
書小復劍夕垂血是爲天安河邊所在五百箇磐石也即
此經津主神之祖矣と有が其第七ニ書小斬軻遇突智
時其血^激激越深於大八十河中所在五百箇磐石而因化
成神号曰磐裂神次根裂神兒磐筒男神次磐筒女神^兒
津主神と見え先斬給へり血^集血^集因て五百箇磐石
と成り其小因て磐裂神根裂神等の化出させ給ふ小

てハ事足はず第六ニ書小復劍鋒垂血^激激越爲神号曰
磐裂神次根裂神と有れば劍鋒より垂る血小依て經
津主神の祖神ハ成坐るあり又其並び小復劍鐘垂血
激越爲神号曰甕速日神次燧速日神其甕速日神是武
甕槌神之祖也と有て此ハ劍鐘より垂る血小依て成
坐る少く共小劍鋒と劍鐘と^同同トの御劍より化出さ
せ給へる神ふれば武甕槌神の^{之子}を稜威雄走神とハ
申し難くり經津主神も同トく稜威雄走神之子と申
す可き御事あり然れば古事記ハ經津主神の御名
傳りてこれバ詮^ハ無し此ハ其十握劍の即神と成

し給へり傳無き故小不意武甕槌神の方小
係て書されたり者ありけり先此疑ひを起さざる
く事能はざるが故小云あり實小此二神ハ一も記傳
も見えさせ給ふ程の御事御在此此件の始終を貫
一坐小心を著て聞べき所小こころ然る時ハ先此時の
神選ハ古事記の如く小先稜威雄走神をを議奏
されし若亦非此神者其神之子建御雷之男神此
應遣と有ハ決めて經津主神の御名をも並申され
しありけり然る時ハ其天尾羽張神の御答小恐之仕
奉然於此道者僕子建御雷神可遣と申給へる時小經
津主神ハ已小諸神の議めも先小舉げ申されし

バ此小其武甕槌神ハも慷慨て申されし事ハ此
の本文小此神進曰豈唯經津主神獨為丈夫而吾非文
夫者哉其辭氣慷慨故以即配經津主神令平葦原中國
と有ハ合せて曉る可き者ありけり但常陸風土記小
自高原降來大神名称香島之天之大神天則号曰香
島之宮地則名豐香島之宮と所見たれば其天安河の
河上の宮を其天迦久神の使して行至り坐し由小依
て香島之宮と申ししを此地ありハ其を移して豊香
島之宮と申せる由ありければ武甕槌神ハ其稜威雄
走神と共小其香島之宮ハ御在し坐けりめて經津

主神の宮ハ佗方ト於テ稜威雄走神と一ハ坐カざり
故ハ其神をシて經津主神の祖神とハ世ハ傳ハる
リ者ハあり可ク如此ク文意を正シ見ル時ハ稜威雄
走神ハ伊弉諾大神の軻遇突智神を斬給ヒ御劔の
御靈の神ハ渡ル給ヘれども其經津主神武甕
槌神の祖神ハ現御身御在ル坐カす大神ハ御
在ル坐カけり其事ハ委ト下ニ四百六十一ノ注ト奉ル可ク
口訣ハ稜威雄走神者上伊弉諾身斬火神爲三段一段
爲高靈云此乎ト有ル古事記ハ捨テ合ハず
雖モ天石ハ所ニ在ル神天上ノ大勢号也經津主神武甕
槌神共ニ化ス爲ル火勢神之孫也ト云フ火勢ハ説ハ右ノ高
靈神ノ縁ヲ以テ云フ孫ハ信シ可ク事ハ實ニ見ル者ハ此
兩神ト其ハ神ノ孫ト云フ事實ハ見ル者ハ此

○是後高皇產靈尊更會諸神ハ第一二書ノ此御蒞ビ
の時ハ故天照太神及復遣武甕槌神及經津主神先
行ハ除ク見ル第二二書ハ唯ハ天神ト有ル古
事記ハ於テ是天照太御神詔之亦遣曷神者吉爾思金
神及諸神白之有ル殊ハ委ト傳ハりけり此時ハ
已ハ天穗日命天夷鳥命二柱神も國土を巡リ察リて其
消息を復シ奏シ給ヘれ此神等も其神議ノ一列ハて
量申給ヒけり事彼神賀詞ハ天穗日命ノ已命兒天夷
鳥命ハ布都怒志命ハ副ハ天降遣ト有ル見レバ此
の神選ハ專ニ其神ヲ主ト取ル擬ハ給ヘ趣ハ

ハ所見たる然る小此小思金神の御名を初小擧るれ
たもハ已小此最初小天穗日命を遣はされりも次小
天稚彦を遣はされり其謀の違へるが如く其
結末小至てハ悉く小其圖小當れり事止百二十小注
るが如く然りて此小議奏されりハ天穗日命御父子
の復奏小依て此國小殘賊強暴横惡之神有て甚く喧
響る由を天神の御許小聞食一定させ御在り坐て此
神議小及ませ給へるりければ其小就て思兼神の
思慮小を給へるるが其荒振神と云ハ上六十小注
せり如く彼黄泉國の汚惡の餘波盡せり引て此小

至れりるを以て其小ハ黄泉國の事とだ小云ハが
甚く思慮小を給ふ火産靈神の御旗の神等小御在り
坐すてハ終小定む可く事を思ひ寄て專此
小思兼神の議奏小を給へる事彼天石産の件の事共
小少り異なる所無き者あるむ有けり然れハ古事記小
名の傳はれるを以て正しと爲べり此小思金神の御
尊の多を書かれ古事記小天照太御神の御名の多を
記されたりハ互小見合合す可き事例の如し○選ハ延良比給布と訓り即天
武天皇御紀小謂ゆる考選ミナトガタと有る是るり即職員令式
部省選叙の義解小謂選者選官也叙者叙位也と見え
選叙令義解小謂選者選擇言選才授官也叙者考叙言

又天出身者選官
ヤ能以流當職
又婦女者無間有
天無夫及長幼叙進
仕者聽其其選
准官人之例之見
えたり

△大殿祭詞別小參
入罷出人能選比
所知心云、

計考叙位也と有ふとの選字を此小用ひせ給へる
者ありの章十五三下奏多麻比志家子等撰多麻比天十一小
打田稗數多雖有擇為我夜一人宿十二十七小水半多
上尔種時比要半多擇擢之業曾吾獨宿有即多
く有る物の中より其一を抽出る義あり者あり源氏
帚木四小其も實小其方を取出む撰ひ小必漏るす
其甚難しや又七中の品の異一小非ぬ撰出つ可
し頃をひふり又九大允の世小就る見る小心答
無きも我物と打頼む可きを撰ひも多り中み
得るも定むトりけり又十君等の上無き御撰ひ

小ハ如何もくりの入リハ比ひ給ひむと有るハ詔
ゆり雨夜の品定少人トを擢り出て其品を定む
りあり又天武天皇十一年御紀小允諸應考選者能檢
其旗姓及景迹方後考之若雖景迹行能灼然其
族姓不定者不在考選之色と有る此ハ預ト置へし○磐
裂此云以敷婆婁良海本小此云伊和左思と作る和字
誤り波小作る可し私記小ハ以巴左久と有り金澤
本小ハ此云以斯婆宜と有て如此く定むるハ何れ
も後小其訓を注せる者あり可し若注さる可くハ此
神名の初て出たるハ四神出生章第六二書小在れハ
其所小就て有へき小然らずし此小出たるハ後の

所爲る事灼然一殊小以數安宴と云事ハ此方より
割く意より神の御稜威の眞盛小御在し坐す由ある
を以斯安宜と云時ハ自然小割る義と成て大小自他
の相違共有る事あり故此二柱の御事ハ巴傳
十八十六丁 十一 三丁 小巳小委く注し奉れりを此
小注し奉るずしてハ解り難き事多在る也四神出
生章第六一書小遂抜十握劍斬軒遇突智爲三段此各
化成神也復劍又垂血是爲天安河邊所在五百箇磐石
也即此經津主神之祖也と所見たれども此磐石を以
て經津主神の祖とハ如何ハ申す可くハ第七一書

小又曰斬軒遇突智時其血激激越染於天八十河中所在
五百箇磐石而因化成神号曰磐裂神次根裂神兒磐箇
男神次箇箇女神兒經津主神と有る此ハ磐石の成
れり事を漏されたり然れども其磐石ハ激越たる血
小因て神の成坐る趣あるハ甚く正し傳説ある可
くハ所思えたる然る小髻華山陰小右の第六一書ハ
也即の間小脱文有り其ハ下文ハ復劍鋒垂血激越
爲神号曰磐裂神次根裂神次箇箇男神命亦曰磐箇箇男命
次箇箇女命と有る是より云れハ實小卓見して
實小然無くしてハ聞え難き所ある者あり如此く文

脈を續け見ると時ハ其劔又の垂落れり五百箇磐石
成り出たる其上へ其劔鋒より垂落れり血の激越り
著る此小因て磐裂神根裂神成坐りて云事あり理
甚しき分明しき者ありけり然れハ其五百箇磐石を
以て經津主神の祖小係
る事ハ甚有よし傳ふるあり正しくハ右四百三十
六下小注るが如く稜威雄走神ハ其斬給へり十
握劔の神靈より渡りて給へり若て磐裂神根裂神
打任せし此が御祖の神ありける
こゝも聞えし給へる磐ハ石礫より根ハ樹草あり
此時ハ激越たる其五百箇磐石の事ハ非りけり
其第八一書ハ是時斬血激灑深於石礫樹草此草木
沙石自含火之縁也と所見たるハ別の傳ハ非りけり

此時の殘滴の土石小染入たる傳ふる者あり偕此時
伊弉諾大神の御怒坐る御勢ありハ其火折の深徹る
より外小實小磐を裂き根を裂くよりある武く嚴
大御稜威ハ御在り坐けるあり其御劔の徳用ハ依
て成坐る神等ありけり然るハ如何ある大石と雖も
此を火以て焼く時ハ易く裂得る事有を以て其火神
の御骸の火氣熾るありハ千引の岩の大ありも裂け
碎けりむ事と思ふ可し其磐を裂と云ハ神功皇后元
年御紀ハ大磐塞之不得穿溝云々當時雷電霹靂蹴裂
其磐令通水故時人号其溝曰裂田溝也と見え奥羽觀

香取末社記小
 婚殿所祭般裂神也
 神根裂神也
 書せり神名式
 小河内國河内郡
 石切劔堂前神社
 二座有ハ此二
 狂神あり可く
 谷重遠説小般裂
 列根裂此爲神
 云ハ非あり
 若然ハハ次ある
 般名筒男般筒女
 結りけるも一
 神と爲る少や

往古其神折巖石而出仍郷黨建祠祀之其所破裂巖今
 猶存と云事見え木ハ大殿祭詞本注ハ辟木と云物
 有り推古天皇二十六年御紀ハ霹靂木と云有り其ハ
 ハ列裂ハ云ざれども今現ハ霹靂木ハ裂裂物あるを
 思合す可と者ありハ斯レハ此磐裂神根裂神と
 申すハ本より劔徳の神少御在ハ坐す事次ハの神
 名を説小合せて曉る可くも有ける但此少て盡す
 事と思ふ可ク
 其十卷十一卷ハ此神の御事を注ハ奉ルカ
 委トシ中より其要と有る事を女ハ引出るの云ハ○般石
 筒男般筒女の二神ハ四神出生章第六ニ書ハハ一曰

跡聞老志ハ折石神社在柴田郡業坂村未詳祭神相傳
 往古其神折巖石而出仍郷黨建祠祀之其所破裂巖今
 猶存と云事見え木ハ大殿祭詞本注ハ辟木と云物
 有り推古天皇二十六年御紀ハ霹靂木と云有り其ハ
 ハ列裂ハ云ざれども今現ハ霹靂木ハ裂裂物あるを
 思合す可と者ありハ斯レハ此磐裂神根裂神と
 申すハ本より劔徳の神少御在ハ坐す事次ハの神
 名を説小合せて曉る可くも有ける但此少て盡す
 事と思ふ可ク
 其十卷十一卷ハ此神の御事を注ハ奉ルカ
 委トシ中より其要と有る事を女ハ引出るの云ハ○般石
 筒男般筒女の二神ハ四神出生章第六ニ書ハハ一曰

般石筒男命及般石筒女命と所見て此ハ夫婦の神等あり
 偕此般石筒を般石津持の義ありハ思ひハハ上
 の二神の説を般石を裂根を裂給ふ由ある事ハ明
 くの得ハ此ハ亦劔ハ因ハ御名あり可ハ此第四
 一書ハ大伴遠祖天忍日命云ハ背帶大般劔云ハ又帶
 頭槌劔と所見たる其頭推劔を云ふハハ神武天皇戊
 午年御紀道臣命の歌ハ勾騫都ハ伊異志都ハ伊と云
 句有ハ下ハ時我卒聞歌俱拔其頭推劔一時殺虜と
 書ハれたるハ灼ハ釋小勾騫都ハ伊と頭槌劔也私記曰劔
 名其頭曲ハ注ハ異志都ハ伊を石槌也私記曰劔名

其頭似石と注せり古事記ハ其天忍日命の頭
推之大小と有る記傳十五七下小白檮原宮段哥久
夫都伊と有る是るハ中略借大ハ書紀私記ハ頭推
劔名其頭曲と云ハ纂疏ハ頭槌者劔首如槌也今卑人
所帶之劔有此形也と有る如く三下其十九七下小
久夫都伊ハ此ハ一の刀名ハ非ず一種の製ありて
云ハ伊斯都伊ハ石推あり即上の頭推ハ一物あり
を彼ハ形を以云ハ名此ハ其を石以て作れり由の名
あり別物ハ非ず取要と云れたり伊弉諾大神の當昔
劔の製衣様を云ハハ非ずハ姑く此ハ當昔あり外

小思得る説無ク故小姑く如此ハ云あり又ハ思
右の神武天皇御紀の歌ありハ實ハ二種あり石槌
と云ハ一種の物あり今俗ハ石劔と云て木大刀あり
の如く製衣れ者往々見る事有り予ハ淡路國岩屋浦
所云カの海底より漁人の網ハ羅りて上りたるハ長ニ
尺四五寸し有て其廻四五寸計の物ありガ四五本も
出て其寺ハ在りて云り此ハ予ガ壯年の頃聞たり
を江戸ハ或人の秩父の山中より掘出たるを二本
見たる小是ハ一尺五寸計有て質ハ青石ハ堅硬カ
るを佩刀ハ爲たるを見たり又予ガ弟子照井名柄

△香取社記云物小也瑳殿所祭般名竹筒男神也
般名竹筒女神也
之り神名式小
謂ゆら土佐國
長岡群石土神社坐を此神の

が其出羽國鳥海山より堀出たるもの長二尺計も有
一如思ひ此も緑石少て其質小難言味ひ有り其外
諸國少しも石劍と云事を時聞し其神代小然
る物の有むるも思も寄りし事故小耳少し留めど
りつらと今思へば甚口惜し右の天般鞞るも般名を
以て作れりか如く般名を以て劍の形小作りて征戰の
具小用て此ハ唯人を打休すの具の形なり可
し然し其槌と云るハ右の頭推るもの如く形の似
たるもの有べりし物と打つ状の似たれども
可くや其頭槌の方ハ記傳小叙の頭石少し槌の形
小似たりと大和國三輪山の辺の土中より

堀たりと云るを見たりと谷川氏その事有り其ハ
其國少てハ石劍頭と字音小呼ぶ者あり予も其國
小物為なり一頃三輪山より堀出たるを得て家小秘
藏めげりて甚恐こころけられ其山小返し納めつや
思ひしりりり又骨董の輩小見出ししむハ世の
好事の者の玩弄と成るむ事の煩しひ有て去一宣年
遠江國少て大地震小逢り一頃詣奉りける縁小由て
濱名郡大神社ハ神代の曲玉甚數多小藏めたる
坐せバ其こ一ハ齋奉るバヤと思成て
細の奉りし右小云ると同ト物あり
津此云賦都と有る訓注今本ハ主字の上小在と金
澤本ハ神字の下小書一良海本ハ次る是將佳
也の下小般名裂るより續けて經津此云布圖書せ
り此も四神出生章第六二書ハ注する可きを向後
小書入たりし如此字ハ様小在るけり借此

經津ハ穗津ふり可し富と布と相通ふ例ハ傳十九
小注ヒ如ク天穗日命と出雲風土記ハ天之夫
比命と有リ万葉一大御歌ハ布久思毛與美布君志
持と有ル布久思ハ今俗ハ富具世と云ル物ハ草ハ
どの根を突ツ竹筥を云ル和名秋郷名ハ筑前國穗
浪郡穗波布ハ美と有ル富を布と云ル先ハ此言の通
ふ狀を心得置て試ス小神名式ハ伊豆國賀茂郡多祁
美加ハ命神社御在シ坐ハ決ク武甕槌神ハ渡リせ
給ふ可シ小穗都佐和氣命神社と申ス見エたカ決
く此經津主神ハ御在坐ツの其津と云ハ

打の略ハ可シ若ク古事記ハ白檮原宮段ハ布都御魂
と申ス事の有を記傳十八五書紀ハ節靈と書テ
此云ハ赴屠能游吟磨と有リ節字廣韻玉篇ハ小断色
と注セる意を以テ被用ナるハ可シ今世の言ハ小
物の殘無く清ク断レ離ル狀ハ布都と云ル又布都
理と云フ狭衣ハ布都と見放ツ枕草紙七三
哀れハ聞ル涙の布都と出來ぬ甚端無一宇治
拾遺三小門ハ入ル爲ス沸湯を面ハ掛ルやハ小
思エて布都と得入ズ有リ然レバ此斂の利ハ
て物を清ク断離ツ意を以テ称ヘる御名ハ可シ
補意

と云れり此少其御名義を預の説得られたり
云べき狀あり然る時ハ上章第六ニ書小都無見の都
種々交皆悉尔銷亡給と有る悉字をも訓し撰集抄小
年七長めれば布都小業も爲侍ぬゆり又布都小叶
ふ可しとも思ん侍ぬゆり有る布都も同ト
可し右の都字ハ元ての義悉字ハ皆の義あるが其
等の字を布都と云も其限を盡す諸常陸風土記行方
義ありければ同言ふる事灼然一諸常陸風土記行方
郡條ハ於是布國拓名曰夜尺斯夜筑斯二人爲首師帥
掘穴造堡常所居住胡伺官軍仗衛拒抗中建借間命令
騎士閉堡自後襲擊盡囚種属一時焚滅此時痛殺所言
今謂伊多久之郷臨斬所言今謂布都奈之村安殺所言
今謂安伐之里言殺所言今謂吉前之里見えたる此

文より明しめて義を求む可し其痛殺ハ大小殺すふ
り安殺を安伐之里と云ハ劔を以て斬を云ひ吉前
と云ハ善く斬裂と云義あり右の劔の用を斬ると裂
くとも分ち云らるり其臨斬の二字ハ布都哀那須と
訓べとあり布都奈斬字此少ハ小當り所あり此小就て
思ふふ四神出生音第六ニ書小此神の出自を劔鋒と
見えたる即此下小謂ゆる鋒端是あり又ハ端の言
ふる物々其鈍のより續きて是亦穂の一例ありけ
れば布都ハ穂打して刃を以て物を打断つ義あり是
經津主神と申すハ彼部靈の御名小負る劔の利く

又此神を祀れし
神名式上野國
日樂郡貫前神
社大神と有ハ枝
鉾申す事あり
出雲風土記島根
郡未官知小比津社
と云有抄小入テ
比津村津貫貫貴
神社祭神經津
主命と有リ貫前
と突抜く同
を思ふ可く和都
と比津と異あり
よりを曉可

て物を断離つ如く御功用の御在り坐小因れ御
名あり事を明くむ可し然れハ布都ハ斬字を甚
允當れりける 右の常陸風土記の趣小就て考ふ
物を断離つ惣称ハ右の如く斬字を書て劔を以て
る者あり又其安伐之里を安波安之島と云ハ後ハ其字
音を以て呼ふ事小 ○是將佳也ハ私記小與介年と有
り但天智天皇十年御紀童謡の其一ハ美曳之努能曳
之努能阿喻と有ハ古くハ吉野を曳之努と云るあり
其三ハ奈尔能都底舉騰多拖尼之曳雞武と有ハ万葉
の頃ハ奈尔能と云ハ古くハ曳雞武と云るあり此
小依て此ハ然訓べとあり然ハ八玉澤本ハ此を都

波母能^モ伎美尔余斯と訓る其ハ一理有る事あり其
卷傳廿九 十八^千戈神の條小云るが如く大倭神社
注進狀ハ傳聞ハ千戈神者大已貴命以廣予爲技令撥
平豊草原中國之邪鬼是時大已貴命号曰八千戈神と
有て即神名式小謂ゆる大和國城上郡兵主神社名神
次相嘗 与有る是ありが 大已貴神廣予を以て荒振神
を言向させ給へる小依て此を八千戈神と申ハ兵主
神と申す小等しく都波母能^モ伎美と申すも兵君と
申す御事あり用明天皇元年御紀ハ兵衛を都波母能
と登祢裡と訓え和名抄ハ兵部省を都波毛乃^モ都加

佐兵庫寮を豆波毛乃久良乃官と有る都波毛乃
云ハ兵器の称なり所以小神武天皇戊午年御紀小
吾必不假鋒刃之威坐平天下景行天皇十三年御紀小
多勤兵是百姓之害何不假鋒刃之威坐平其國之有ハ
劔鋒の類を云ふり綏靖天皇前御紀小乃使弓部推彦
造弓倭鍛部天津真浦造真薺鏝天部作箭及弓矢既成
神渟名川耳尊欲以射殺手研耳尊と有る古事記ハ
神沼河耳命曰其兄神八井耳命那泥汝命持兵八而教
當藝志美之故持兵八と見え此ハ弓矢を云ふ又
垂仁天皇廿七年御紀小令祠官卜兵器爲神幣吉之故

△古事記遠飛鳥宮假小備作兵器有る下小亦時所作矢者云ハ有るハ弓矢を以て兵器云ハ非ず
兵六器の中弓矢夫
有る云々思混
ふ事勿ル

△弓矢小就て思ふ
小亦月物の上略
可なり打小神武
天皇戊午年御紀
大御弓小曾祢梅
屠那藝五下宮
之夜夜夜夜夜
破洗輪例儒千智
之智夜夜夜夜
殺字の我かり
又及物ハ今も世
小刀鋒の類を然
之ハ其如

弓矢及横刀納諸神之社と有る此小ハ弓矢横刀を
以て兵器と云ふ持統天皇三年御紀小ハ兵仗を訓り
記傳二十四四下小兵ハ都波毛乃と訓ハ刀鋒の属の
惣名あり名義ハ鐘物あり和名抄小鐘和名都美波
と有る匠具農具其餘も諸器小刀鋒の属の物ハ多在
る中小兵器小局あり鐘有る故小此名を負るあり都
美波の美を省とて都波と云ハ後世ハ鐘をも即
都婆と云小同ト取云ハ然る説ハ征戦ハハ
刀鋒を以て第一と爲る故小弓矢及諸の武器をも凡
て云称して假ハ軍と云ハ射合前も云事少し弓を互

小射交す小起りて刀鋒を以て戦ふも其称を用ふ
る小同トうる可し若し此兵器を以て軍の事小及ぶ
小起兵と云ひ動兵と云ひ其事を主る大將軍小當
る人を右の如く兵君と云ひ兵王と云ひ其小使の
人^{ツモノトナリ}を兵衛と云ひ兵士と云ひ然る小後世小至り
て武士と指て唯小都波毛能と云ハ誤れり事の甚
者ありけり記傳小漢國ありて兵ハ械也とし戎器
也とも注して其義ありて轉して其兵
を執人を多く兵と云る其をも誤りて都波毛能と訓
る後世ハハ只勇士の稱の如く成て剛者の意と
心得て刀鋒の属の名ある事を知ずありぬ皇國小
ハ古其人を指て都波母能と云る事ハ無り書紀
あり小人を云る兵字又率字なり然訓ハ誤り
又其を伊久佐毘登と訓る是る宣しと云れたりハ

實小然る言あり○天石空所任神小古事記天谷坐天安河
山之天石屋名伊都之尾羽張神是可遣略中且其矢尾羽
張神者逆塞上天安河之水而塞道居故佗神不得行故
別遣天迦久神可問略下と見えたり其天安河と云ハ四
神出生章第六一書小遂按所帶十握劍斬軻遇突智爲
三段此各化成神也復劍刀垂血是爲天安河邊所在五
百箇磐石也と見え第七一書小又曰斬軻遇突智時其
血激越染於天八十河中所在五百箇磐石而因化成神
云と所見又古事記小於是伊特諾那岐命按所御
佩之十拳奉劍斬其子迦具土神之頸尔著其御刀前之血

走就湯津石村所成神名石折神次根折神云々次著御
木亦走就湯津石村所成神名甕速日神次通速日
神云々亦有如其軻遇突智神を斬給へる
血の依て天安河邊なる五百箇磐石成り其劔鐔
劔鐔より垂落れ血の其已成り五百箇磐石
亦激越て經津主神武甕槌神の祖神等成出させ御
在坐し此二柱神共其稜威雄走神の御末の坐
す由四百三十一火注せざる如し是就其稜威雄走
神の天安河の河止の天石窟のを住處なり御在坐
坐す所縁を明め奉る小足なり又天香山と云ふ此

時の斬遇突智神の御骸の天上小上りて成り香山名
あり由をも合せ思ふ可きなり偕此天石窟と云ふ實
鏡開始章小謂ゆる日神の閉籠らせ御在坐けると
同物して眞の石穴ある事傳十九百二十小注せるが
如し右小引る古事記の天石窟を旧印本小天石窟と
有り石窟と云ふ類聚名義抄石窟字小伊波牟呂
の訓有り異なり事無し記傳ハ此天石窟ハ實小
石以て構なる屋ノ有むと云ハ然る事ハ別の事ト云ハ
日神ハ天石窟をバ宮殿の堅固ニ由り別の事ト云ハ
れハ大なる僻事あり實小石窟の中ハ入るを給へ
用たりハ在けれ逆塞上天安河之水と云ハ記傳十
四下小逆塞上ハ川水を塞留堪へて側の方へ引遣
を云ふ其ハ下へ流る水を横小引遣ハ故小逆マル

上とも云ふり常小邪ヨコヤフと云と逆サカサマと云を必カナラし上へ回
す小ハ非ヒず万葉八五十三小佐保河之水サヘノカミ塞上而殖之
田平と詠ウタりも同ナニく借世小物小水を湛シへ其中小砥を
安て刀劔を磨くハ此神の如此河水を塞湛へて石室
小坐カり小縁ササ水ミと云れハ實マコト小其本縁を明アキラけり
れたりハ説ワカふ者モノあり猶逆塞上サカサマ云ハ傳ツの状カタを思オモふ
小仁徳天皇十四年御紀小河水横逝以流末不駛聊逢
霖雨海潮逆上而卷里乘船道路亦溼故群臣共視之決
横源而通海塞逆流以全田宅と有ハ洪水を治給ツ入ル
小て此の例ナミハ非ヒずと雖モ其水の逆上サカサマあり溢コるハ

状小於カてハ等ナしく有アり故思オモふ此天安河の河上
あり所トコロの井イ偃イを置オケて其上水を通ス内ウチを深くして水
を塞湛シへハ御在ミコ坐カりて其天石窟の所在トコロハハ其
水中の島ありけり然れども唯小河中の島ありむ小
ハ行く事容易マカ付ケり可カきを此國クニ少オく謂イハゆる湖水の
如く小廣く構カませ給ツへる者ありけり常陸風土記小
自高天原降來大神名称香島カ之ノ大神天則号曰香島之
宮ミヤ地則名豊香島之宮ミヤと所見ミたり天上の香島之宮ハ
即其天石窟の所在の島を云ありけり若て此國少く
し其宮を移ウツりて常陸國鹿島郡鹿島神宮をハ豊香島

△塞上と云例ハ津氏
 夕負小御胸塞上
 多小胸給ふ塞上
 時ハ胸塞上つ
 甚ト難堪ケ
 小感ふ業と爲給
 六御法小胸の
 塞上と云難堪
 ありと有り

宮と申せるが其神宮の北あり沼尾池の事と同記小
 古老曰神世自天流來水沼と有る此一事を以て天
 上の狀を移せる事灼然と小万葉十四丁十一常陸國歌
 小比多知奈流奈左可能宇美乃と有る謂ゆる浪逆海
 ありけりが其鹿島郡の断離して島ありし頃其兩門
 より浪を塞入て逆とひけるが故小其名ハ有る彼
 天安河の河上小水を塞上て御在し坐ける狀小似通
 ひてある所思えたりける是即天上してハ香島之宮
 島之宮と云ふ所以ありける然れば此の鹿島神宮ハ
 似たりけむ事
 と思ふ可あり塞道居故他神不得行と云ハ天安河の

任ありむハ河原より傳ひて行べし道路も有るむ
 を右小云々如く天安河の水を逆小塞上て水を湛へ
 御在し坐が故小通ふ可と道路の無るり古事記海神
 宮段小豊玉毘賣命の白妾恒通海道欲往來然伺現吾
 形是甚作之即塞海坂而返入と云も海中の道路を塞
 り此小も塞道と云ハ然計り武雄皇神等の御在
 し坐す所小在ければ荒濤を逆卷みとして甚可畏
 くりけむり舟も筏も及ぶ限ハ非りけむ事上
 文小照して思ふ可と者あり他神者不得行と云も其
 道を塞給ふ所以の事小非ず其御稜^威滅の甚可畏

く御在り坐けり故小其神小所縁無き神ハ寄り近著
おどけれハある事故別遣天迦久神と有る別ハ殊字
の義少く抽出たる義あるを以曉る可くある有ける
記傳小別とハ尋常の神ハ得行すト云故小殊小優た
る神をと云意つても有るむと云れし説の如くある
ふり有 天迦久神ハ記傳小崇神天皇四十八年御紀小
八廻ヤタヒヨシキス敷手刀と有る万葉十三七小劔刀鞘從拔出而伊香
胡山と續け詠るハ冠辞考小鞘すの拔出して撃手續
けたる少く伊ハ發語小取れりあり偕伊香胡山ハ和
名抄小近江郡伊香伊加郡伊香伊加郷と有る處あり
と有る思ふ今此劔神尾羽張神古を誘ふハ起功

を以て劔を抜出て撃く意小称たるおもや有る然る
バ迦伎神コシ云へきを迦久と云ハ唯通ふ音あり
偕劔を迦久と云ハ撃字を書るを以思ふ小劔を振て
物を切り状を成すと云ある可し其ハ其劔を用ひむ
と爲る時小試る意あるバ愈神今の名小由有り若然も有
ハ式の近江國伊香郡伊香具神社名神大又伊香具坂神
社ハ有ハ此天迦久神を祀れる少も有べし偕ハ彼万
葉歌ハ愈由有聞ゆるを取と云れたるハ甚珍
し事少く如何少く迦久神の説然も有べし又平田
の玉禊ハ天鹿神ありと云り上百三十一天鹿兒弓の所

小注るが如く上代小ハ鹿を迦久と云る小鹿島の神
獸ハ一も鹿ありければ然も有べと説ある小就て熟
思ふ小天鹿神を被遣たりハ右の較ツチカキ力の事ある小
其小乗御在坐神ハ有るを其傳を亡るひつ
る小ハ非引りとも所思えたりける又記傳小云然
名も此神社より出たり可ク和名抄小伊香ハ郡名郷
名共小伊加古と有り万葉も同ト神社ハ伊香具あり
本より古とも具とも通ハク云の備鹿ハ天香山の神
あり可クと云れたる實小然り
獸ありが其山と云へハ軒遇突智神の御骸の上れ
るり其天石窟ハ彼被斬給へり其血が凝て五百箇
磐石と化れ其一あり若て其向い坐神ハ決て天

天兒屋命小御在坐あり可ク常陸風土記小天之大
神社坂戸社沼尾社合ニ處摠称香島之大神因名郡焉
風俗説曰霞と有て坂戸神社ハ天兒屋命沼尾神社ハ
零香島之國
經津主神小坐る小春日祭詞小鹿島坐健御賀豆智命
香取坐伊波比主命枚岡坐天之子八根命比賣神四柱
能皇神等と有て如此く相因り也給ふ所以是小在と
ころハ所見たりけれ故其伊香具神社ハ天兒屋命小
御在坐べク荒木田系圖小據て考る小天兒屋根命
子天押雲命子天多祢伎命子宇佐津臣命子大御食津
命子伊香津臣命と有て五世孫るるが安寧天皇之御

世奉仕と有り然る小帝王編年記小古老傳曰近江國
伊香郡與故郷伊香小江右郷南天之八女俱白鳥自天
而降浴於江之南津于時伊香刀美在於西山遙見白鳥
其形奇異因疑若是神人乎往見之實是神人也於是伊
香刀美即生戀愛不得還去竊遣百犬盜取天衣得隱第
衣天女乃知其兄七人飛昇天上其弟一人不得飛去天
路水塞即爲地氏天女浴浦今謂神浦是也伊香刀美與
天女弟女共爲室家居於此遂生男女男二女二兄名意
美志留弟名那志等美女名伊是理比咩次名奈是理比
賣此四人伊香連等之先祖是也と所見たる伊賀刀美

ハ右の伊賀津臣命より其祖天兒屋命を祀り小伊香
具神社小詣りれ一程小在一故事あるむ其意美志
留ハ姓氏録九京神別小伊香連大中臣同祖天津兒屋
根命十世孫臣知人命之後也と所見たる是して伊香
連ハ此少く支れたる者あり然るて其那志等美ハ藤
原系圖小謂ゆり梨迹臣命より荒木田系圖小懿徳
天皇之御世奉仕と見え其子神聞勝命ハ自孝昭天皇
至開化天皇奉仕之神世と有り然る小常陸風土記小美麻貴
天皇之世大坂山乃頂頂尔白細乃大御服坐而白捍御杖
取坐識賜命者我前平治奉者汝聞看食國平大國小國

事依給等識賜岐于時追集八十之伴緒舉此事而訪問
於是大中臣神聞勝命答曰大八島國汝所知食國止事
向賜之香島國坐天津大御神乃舉教戒事者天皇聞諸
恐驚奉納前件幣帛於神宮也と有て其神聞勝命の申
これハ神代小天兒屋命の武甕槌神を薦めて國土
を令平給ひ一事を就て家傳の説を以て奏上され
あり可一然して其神聞勝命の子久志宗加身至有り其
子國摩大鹿島命有り其子臣狹山命と續きたる小大
鹿島命ハ其神宮の地名を負給ひ臣狹山命も同記小
倭武天皇之世天之大神宣中臣臣狹山命云々云事

國
△天平十八年三月
子常陸郡鹿島郡
中臣部下烟石部
五烟賜中臣鹿島
連之姓見之
寶龜

有を以て古より仕奉りし事を知べし續紀小寶龜八年七
月乙丑内大臣從二位藤原朝臣良繼病叙其氏神鹿島
社正三位香取神正四位上と有て此兩神をも藤原
氏の氏神と云事必所由無くや其ハ天穗日命
の大己貴神を媚鎮めて國土を避奉り給へる由を
以て出雲國造の世に其祭祀を主とすと專同ト狀小
り有べりけり又同紀小十一年冬十月丁酉授常陸
大宗外從五位下と有が如く當宮及香取神宮の祠官
共小大中臣氏あり又鎌足大臣の事を大鏡又簾中抄
字類抄等小常陸國の産あり由若て傳十五二百六
云々を思合す可きなり十七丁小
注るが如く天上小在天津河の名を移して近江國

小安河と云有り郡名を云ふ野洲郡と云ふも少
縁の所由とも所見ざりけり伊香郡伊香具神社名
大ハ此小謂ゆる天迦久神小由有を其祭を主と云ハ
中臣の遠祖伊香津臣命より始りて伊香連の仕奉る
事ありを以て攻む時ハ此時天迦久神と云ハ其使
令ありて其行向ひて天尾羽張神等小天神の詔命
を傳させ給へり天兒屋命あり坐す故小又其御末
少鹿島香取兩宮と云ハ氏神とハ持齋の事と云ハ
りハ有べゆりけり諸右の帝王編年紀小此伊香連
等之先祖是也と所見たり小伊香宿禰の系譜を見小

天兒屋命五世孫伊賀津臣命其男三人有り長男梨迹
見命次男臣知人命三男伊世理命と有て其臣知人命
の子角豆命其子古加斐命と有て譜小磯城瑞籬宮御
宇朝廷奉齋淡海膳香具大神と有ハ此御世小官社小
成れたる可し由其子白猪主命其子鳥見命其子巖石
乃臣命其子牟久太乃臣と有る譜小供奉難波高津宮
御宇朝廷と有り其子黒麻呂乃臣其子志那古乃臣其
子與呂豆乃臣其子首麻呂譜小伊香具臣十市倉掾宮
御宇舍人と有り其子小形小男三人有り長を鹿養中
を宇庭と云く系別小在り末子を般名金と云て譜小居美

濃國安八郡と有て其孫道守の父安倍ハ壬申の功臣
ありけりハ臣姓を改めし伊香津連ハ成るる姓氏録
の伊香連是る可し偕其長男鹿養の譜ハ伊香郡関
發祖也と有て其子稻主譜ハ外從六位下伊香郡大領
奉齋伊香具大神と有り其子船主譜ハ外從五位下壬
申乱供奉大海人尊と有り其子池守其子牛麻呂其子
當武其子豊原譜ハ伊香大領外從五位下嘉祥元年三
月賜伊香宿祢姓と有り其子厚代其子厚行譜ハ神祇
大輔雅樂頭寛平延喜人古今第八作者と見えたり此
全く子孫少りて其祖神ハ仕奉り郡領と爲て朝廷ハ

仕奉りし状あり猶此社の天兒屋命と思しハ菅
家御自等筆の額とて正一位勳一等大社之大明神金剛
覺印菩薩と云有と云り三代實録ハ貞觀元年正月廿
七日甲申奉授近江國從五位上勳八等伊香神從四位
下同八年閏三月七日壬子授近江國從四位下勳八等
伊香神從四位下と有て神階の事合ざれば後の所爲
ふがく金剛覺印菩薩と異し御名を負せ奉り金
剛ハ天あり覺ハ智サトル慮あり本ハ此ハ天思兼神の
御名あるの在し然る佛めりし御名ハ稱へた
る物より今と成てハ其祭神の本説を識る便理と成

れども神慮の令然々所ふる可きあり
右件天迦久神の事と説
とて伊香具神社の事小及び終小ハ伊香宿祢伊香連
等の系譜小迄移りぬを贅言の如く思ふ人も有る
めども此事を注す因小天兒屋命と經津主神武甕槌
神と相親しく御在し坐す所以も知れ又藤原氏小
て鹿島香取兩宮を氏神と爲る由縁也
此小至りて詳く小知る事あり
○稜威雄
走神ハ傳十七十一小注一奉るが如く四神出生章第六
一書小遂後所帶十握劍斬軻遇突智云々云ふ其十
握劍の御魂小坐り故古事記小ハ其事の終小故所斬
之刀名謂天之尾羽張亦名謂伊都之尾羽張と所見た
り然る小神代本紀小ハ復劍鐔血敷越爲神亦走就
湯津石村所成之神名曰天尾羽張神亦名稜威雄走神
亦名甕速日神亦

曰稜威雄速日神今坐天安河上天窟之神也云々此神
亦曰甕速日神
を以て甕速日神と爲る同神と爲るハ上云々ハ十握
劍の名ありを御天降段小至りてハ一柱神小て出給
へり小依て私小文を作為け者小て信し
るむ有けり此神の成出を御在し坐ける本を考る
小伊弉諾大神の御怒坐て軻遇突智神を斬せ御在し
坐しと爲る給へり御靈の凝結りて一柱神と成
給ひ即劍と化して御在し坐て伊弉諾大神小連れと
せ給へるを其事終させ御在し坐すと直小經津主神
武甕神槌の祖神等とも帥く天安河の天石窟小任せ給

へりりりけり或ハ劔と成り又ハ頭身と成て妙ハ
 奇異トシテ神と云ハ所思えたれ稜威の義ハ己ハ傳
 十五百三十五丁ハ注せらる尾羽張の尾ハ鋒端サと云ふ
 可一神名式ハ伊豆國田方郡劔ノ午夜ノ命神社ト云
 有ハ尾ヲイハ弭ハ妍ハハ鋒端の美麗ト云ふハ一ノ葉七
 六ハ劔後鞘納野ト有ハ劔後ハ劔尾ハ同ト云
 鋒端より鞘ハ細むる者あり由の續けり備上代の
 劔の形ハ一ノ葉十一ト三ハ劔ノ諸刃利又ハ二十ハ劔
 刀諸刃之於荷ト有ガ如クハ兩刃あり一ハ彼不動
 の利劔ト云狀ハ銳の方の兩方ハ張出たる物あり

けりハ此を以て尾羽張ト云ふり又其を此ハ稜威
 雄走神ト申せ雄ハ穗ツ言ハ同ト云ふハ神名式ハ
 和泉國日根郡火走神社ト申す有ハ風土記ハ所祭軒
 遇突智也ト云ハ若クハ其斬給へりハ尾羽張の御
 靈を祀りしハ神名の混れたるハ此の雄走と同
 義ありハヤ右ハ尾ト云ハ銳ハ所祭即穗ハ云ハ鋒
 槍ハハハ突鋒を穂ト云ハ穂先ト云ハ是ハ古ノ節
 用集ハ劔を又速ト訓るを説文ハ銳利也ト注一今ハ
 刀劔ハハ鞘走ト云事の有を思合す可きハ然れ
 ハ尾羽張ハ劔の形ハ就て云ハ雄走ハ尖鋒の銳利ハ

公興仁天皇三十九年御紀
 敷命居於茅渚
 菟碓川上宮作
 劔一ノ口ト有ハ其
 時ハハハハハハハ
 給へハハハハハハ
 けり備

る謂と以て称奉れ、御名あり有けり。記傳ハ走ハ
ふ利ハ疾と同言、又走と意同ト俗小口疾く物言を
口の走ると云小同ト云レハ然る言、源氏帚
木小只上方計の情、走書時節の應へ心得て云、
又此方破處の点長、走書、又打讀と走書、搔引く
状、又古、今俳偕、小逢、手早、小筆を走、
火、心、燒け、居り、又枕草子、小駮、物、走、火、と有、
孺、火、の外、へ、列、飛、を、走、火、と云、其、外、走、湯、走、競、走、
疾、く、走、出、る、義、是、なり、○獲、速、日、神、の、名、義、ハ、傳、十、百、二、
小、己、小、注、せ、ら、が、此、少、注、奉、可、先、獲、速、と
續けたるハ古事記事代主神の老向、速獲之、多氣佐波
夜逢奴美神と申す神名の速獲ハ此を倒反、小、
り其神名の速獲之ハ發語、武と續け、る、
諸此

獲と云語ハ、記傳五、七十、小美迦ハ伊迦、小通、云
あり、舒明天皇前御紀、小嚴、此云伊箇之保虛、皇極天
皇前御紀、小重日、此云伊柯之比、又祝詞、小伊賀志、御世
又伊迦、米志、伊迦、志、又空穗、俊蔭、小斯、程、小東國
より都、小敵、有、人、報、以、爲、む、と、思、ひ、て、四、五、百、人、の、兵
少、て、云、く、恐、ろ、う、げ、小嚴、者、共、一、山、小亮、て、目、小見、ゆ
る鳥獸、を、殺、食、ハ、源氏、葵、十、八、小彼、姫、君、と、思、
そ、人、の、甚、清、く、在、る、所、小行、て、左、右、引、弄、ぐ、り、現、小
も、似、ず、健、く、嚴、き、一、向、心、出、來、て、打、擦、く、る、み、ぐ、手、習、
小女、鬼、少、有、む、云、八、貢、つ、け、き、を、頼、し、う、嚴、
狀、を

人小見せむと思ひてと有る伊迦伎又明石九小巖の
一と雨風雷の驚ろく侍りつれば云くあると有る伊
迦是より其美迦と通ふ例ハ近却崇神祭詞小此の武魔
槌神と武雷靈命と有り又巖とを美迦と云例ハ仁徳天
皇十六年御紀歌小弥箇始報破利摩波擲摩智と有る
弥箇始報ハ速侍と云む發語より巖の潮の速
きこと云ふ續きあり神代紀小謂ゆる彗星ハ巖と云
ひ彗星ハ巖果あり補と云れたるより美迦と伊迦と
相通ふ由甚明くあり其弥箇始報と云事ハ播磨風
土記饒磨郡伊和里條小昔大汝命之子火明命心行甚

強是以父神患之欲遁棄之乃到因達神山遣其子汲水
還來見船發去即大瞋怒仍起風波追迫其船於是父神
之船不能進行遂被打破中略尔時大汝神謂妻等都比賣
曰為遁惡子返遇風波被太辛苦哉所以号曰瞋鹽曰苦
齋と有る彗潮ハ瞋鹽と云事ありければ實ハ彗と巖
と説れたる事妙ありとも妙ありけり偕美迦ハ真氣
あり伊迦ハ弥氣あり共ハ神氣の内ハ充滿て勢の外
小張出るガ如故小人其氣壓ハれて伸る事能はず
即勇健と謂此小在る事此下ハ武彗槌神の此神進
曰豈唯經津主神獨為丈夫而吾非丈夫者哉其辭氣懐

△速玉之男命

慨と有る即此小謂ゆる美迦と伊迦との義を盡せる
物と思ふ可くある有ける下四百七見合す可此氣
の伸るに屈よると小依て勇と怯との差ハ有る事
あるを世人唯小形をのりて云て氣の事を少く云ふ事
ハ如何ありける事グヤ速ハ迅速義あり速秋津日
命ふと御名の上小置る有り火之夜勢速男神ふと言
の中小置るも有り比皆同ト事あり右の速男ハ平家物
語小院中の速り男の者共源平盛衰記小速り男の若
者廿五騎云々有る是より又平治物語小大クの剛
の者早走の牟利有り云ハ更カて波夜理加と云事
有り帚木ニ十小聲耳も早ウリ云ヤ云紅葉加ニ

六小人小従へハ少一早ウリ云ハ云戯言云交ハ末摘
丁十七小女君の御乳母子侍従とて甚早ウリ云ハ云若人
甚心元無く側痛トと思ひハ若菜上丁百ハ小文の事を
早ウリ云ハ云走リ書ク云々多ク又波夜理心と云事
有り末摘丁十四小然コ可クカク仮ルも御在ト通ルむ
を咎め給ふ可ク人ハ無クハ云と仇メと云ハ云早ウリ云心
ハ打思ひハと見え又唯小波夜流と云事有り空徳國
讓下小御炬火燈ト渡リて速ク馬小乗リ云々國讓中
小面白キ手を遊バハ早ウリ云ハ云人の有無も知ラぬ云ず
落窪一小此頃御心進リ出テ氣想早ウリ云ハ云思ハ見ル

やと宜へハふど云々波夜流也此の速も同義ある
少く右小注せる稜威雄走神の走り也ふ言と又異か
る事ナして次小日と云ハ劔の事ある其利を云者ふ
るあり右小引仁徳天皇十六年御紀の湍箇始報ハ
巖潮破利摩波擲摩智の波擲小意の續け
る此小瓊速と續ける狀の日ハ身一あり劔を云る
其事傳十百三廿六十九小注る事共を見合せて曉る
可卜儲常陸風土記小久慈郡薩都里中東大山謂賀毗
礼之高峰即有天神名称立速日男命一名速經和氣命
本自天降即坐松澤松樹八俣之上神崇甚嚴有人向行
大小便之時令示灾致疾苦者近側居人每甚辛苦具狀

請朝遣片岡大連敬祭祈曰今所坐此處百姓近家朝夕
穢臭理不合坐宜避移可鎮高山之淨境於是神聽禱告
遂登賀毗礼之峰其社以石爲垣中種属甚多并品寶焉
拵金器之類皆成石存之凡諸鳥經過者盡急飛避無當
峰上自古然爲今亦同之即有小河名薩都河と有る此
立速日男命ハ瓊速日神ハ御在坐と云る其松樹
八俣の上小御在坐と云る劔ある可く所思也景行
天白王四十年御紀ハ日本武尊の解一劔置於松下と有
る木小掛給ひハ狀ふハ速日男ハ此の速日と
同しと立ハ劔ナの借字小見る可く亦名を速經和氣

命と申す此ハ速振別り彼道速振ふと云如く神威
の健うり小御在一坐を以て称申せる可一峰名
を神賀毗礼と云ハ神荒の略と聞ゆる此の瓊速
日神小大似著一上小此神の御孫武甕槌神の
鹿島神宮小坐ふ由有る事あり神名式小久慈
郡薩都神社御在一坐を常陸國廿八社鎮坐記小在薩
都郷今佐都宮也祭神立速男命一名速經和氣命号曰
薩都大明神佐都東謂之賀毗礼之高峰と注一式社考
小佐都宮小在り立速男命一名速經布別命と有り然
る小其風土記の校本頭書小按今多賀郡宮田村有神

峰山蓋是也山上有社謂神峰山權現宮田助川會瀬三
村之鎮守也例祭四月十九日山下造假殿迎神輿十一
日還輿と云れバ右の説とハ別ありが如とを今考
る小賀毗礼之峰ハ神体の御坐所り神靈をハ其薩
都神社り今祀給へるハ有けりり借薩都と佐
須とハ言甚近りけれバ劔の神靈を祀る謂ふも合
へり神武天皇戊午年御紀小謂ゆ節靈を古事記小
古事記小此乃名云佐士布都神と有る佐士ハ刺の義
あり小思合す可きあり都と須と通ふ例ハ傳廿三
十九小注るが如く寸斬の寸と都多とも須多と

ことも云ふ例是なり續後紀小美和十三年九月己亥
朔丙午奉授常陸國勳十等薩都神從五位下三代實録
小貞觀八年五月廿七日庚午授常陸國從五位上勳七
等薩都神正五位上同十六年十二月廿九日癸未授常
陸國正五位下勳十等薩都神從四位下と見えたる美
和と貞觀との間小神階を進しければ脱たる可く
又次の神階勳位小少疑ひも有れども本の任小擧つ
故此神社予が右小云所の如くハ癩速日神の御社と
てハ天下小唯此一所の多ありけり和名抄郷名小久
佐都を誤れり其次小都と云有る上小佐字を脱せ
り或説小其一字ありハ一本小薩都と有と云り東

鑑ハ佐都と出たりと云此所の説事實を克辨せし
人ハ強たりと云む然れども考の及ハ限ハ究めず
ハ有べりと云むガ上小武甕槌神の祖神の知れ
せ給ハざるを争ハ快ハハ爲む此を以て如此く
明らめ奉りて神小質りて○燖速日神良海本ハ燖
を燖小作り瑞珠盟約章第三一書小謂ゆ燖之速
日命ハ同名ナリて異神なり傳十八一三十一小注せり儲
此神の名義ハ傳十百六小注るガ如く火速身ハ火
の物を焼行く事の迅速ある状小刀を以て物を斬断
つ事の鋭利あるを譬へたる御名ある事火神の御名
を古事記小火之夜藝速男神と申せりハ思ハ合す
可一右四百六小注セ雄走ハ火走ハ古今集哥

小走火を詠む枕草命小騒がし物走火と云ハ火の
外小刎飛ぶを云ふ景行天皇四十年御紀日本武尊
の為人を譽給へる詔小猛如雷電と有る伊那都流
岐と訓たるハ和名抄小電和名伊奈比加利一云伊那
豆流比と有る物の辟言ふが右の訓ハ劔を電光小比
へ給へるをも考ふ可き者ありし神名式小伊豆國
田方郡加理波夜須多祁比波預命神社の加理波夜須
ハ刈刻カキして竹と續く發語あり多祁比波預ハ武熯速
小熯カキ此熯速日命の御事と所見たり此並び小劔ノ乎
夜小命神社火車須比命神社御在り坐る由有て思

ゆり事共ふり万葉十六三十一小佐男鹿乃來立來歎久
頓尔吾可死王尔吾仕年吾角者御笠乃波夜詩云々吾
毛等者御筆波夜斯云々吾実者御奈麻須波夜志吾伎
毛母御奈麻須波夜之吾美義波御鹽乃波夜之云々角
をも毛をも肉をも肝をも切刻る事と波夜詩云云
と右の波夜須と同言あり多祁比波夜預ハ武比波預
連命命ハ熯少し日を略きて称申せり右注云々如く
此の日ハ刀の事ありを上加理波夜須と云時ハ其
少て刀の事ハ聞ゆ故ハ略る者あり可一偕
神代本紀ハ亦曰捷速日神と有る捷ハ捷を誤れり
と思ひ一小釋小引るハ然有る若亦名小御在り坐
るもハ右四百四十五下小注せり石捷の例ありふ
り○武彙槌神の武ハ武素戔鳴尊又ハ右の多祁比波

預命ふどの多祁小同一傳十五八十上百二十小委一
く注せり甕の義ハ右四百六甕速日神の所注るが
如く巖イカ多り神名式小伊豆國賀茂郡多祁美加命神
社坐ハ武甕命と申す事少く正しく亦名と所見た
り迂却崇神詞小健雷命と有ハ武巖槌命と申す事小
て此美加と伊加と通ふ例多り源氏葵卷丁十八小健く
巖イカ一向い心出來る打捺ぐるまと有ふとも此の
御名の續ま小由有り槌ハ大力と言相通ハ多り傳十
百ハ此神の御名の下小注るが如く古事記小故所斬
之力名謂天之尾羽張亦名謂伊都之尾羽張と有て御

天降段小ハ坐天安河上之天石窟名伊都之尾羽張
神之其神之子建御雷之男神之と有る其伊都之
尾羽張神ハ此小ハ稜威雄走神と有て劍小因ハ御
名多小合せ其神之子と有て以て劍を以て此小
も御名小負せ給ふ可き所以ありとも思ふ可し若て
彼十握劍の鋒より成出給ハ神の故少也經津主神ハ
も專鉾を以て御切成一坐りと思ふハ神名式
小謂ゆる上野國甘樂郡貫前神社名神を一宮記小經
津主命と有ハ本國神名帳小ハ正一位按鉾大明神と
有る是なり然して此武甕槌神ハも其鐔より成坐

る由を以て劔小依り御功を立させ給へりと思ふ
ハ神武天皇戊午年御紀ハ天照大神謂武甕槌神曰夫
葦原中國猶聞喧擾之郷焉宜汝更往而征之武甕雷神
對曰雖予不行而下予平國之劔則將自平矣天照大神
諾と有て部靈の御劔と天降させ給へる是なり但其
御劔を布都御魂と申せば本より經津主神の神靈を
託させ給へれども取擬はせ給へるハ武甕槌神あり
御在り坐す事の運びを思ふ可くある此二柱神ハ
ハ右の如く出自各異ハ坐せども御刀を合せ御在
り坐す狀ハ至りてハ實ハ一神同体の如く御在り坐

す御事ありける然れば同ト劔の用ハ於てハ貫前神
ハ專經津主神主とせ給ふ可く伐つ事をハ此神の
主とせ御在り坐すと申せども少くハ僻事ハ
ハ非なり○此神進曰ハ古事記ハ天迦久神を遣はて
問はせ給へる事所見たり然る時ハ右四百三ハ注せ
るが如く稜威雄走神より先經津主神を抽出て薦め
給へるを以て此神の自進出させ給へる御事と所見
たり儲進ハ素戔鳴尊ハ進雄尊の義なり須勢理昆
賣命ハ進姫命の由あり此皆御心の進りなりて健く
御在り坐す謂あると同言あり此第五一書ハ故吾田
鹿葦津姫抱子而來進曰天神之子寧可以私養乎故告

狀知聞之有が如く進曰ハ慄慨テ物云時の事ハ
大殿祭詞別ハ宮進ハ味進宮勤ハ亦勤ハ之米ハ有ハ進ハ
勤ハとを並べたるハ宮仕と厲ハむ方を云ふハ万葉三三
ハハ小思家登情進莫風侯好爲而伊麻世荒其路四
小大船乎榜乃進ハ尔ハ般尔ハ觸ハ覆者ハ覆妹尔ハ因而者九
小益荒夫乃去能進ハ尔ハ此間ハ偃有ハ又三盧ハ八ハ燎須須ハ師三
競ハ有ハ須ハ師ハ此ハ同ハ源氏帚木十三哀ハ進ハ
之ぬハバ即尼ハ成ハぬ可ハ又ハ三ハ醉進ハて皆入ハ箒
子ハ卧ハつハ静ハりぬ明石十六人進ハて参ハるハ然ハる方
小ハて混ハるハハハて思ハはばハ撞ハつハ小ハ少ハ煩ハるハ

才ハ氣添ハて稜ハへハの進ハ給ハへハ小ハや心苦ハしハる
くハ画合ハ十九ハ才覺ハと云者ハの云ハ甚ハ進ハぬハぬ
人の夕ハ務ハ六ハ十ハ世中ハの痴ハがハ一ハ名ハを取ハりハて
も難堪ハきを念ハして此所ハ彼處ハ進ハぬ氣ハさハばハ一ハ辺ハを
數多聞過ハ一ハ有狀ハハハ総角ハ四ハ十ハ小色ハめハうハげハ進ハぬ
たる下ハの心取ハて見ハゆハも有ハて浮舟ハ十三ハ小物ハの床ハ
そ方ハ進ハぬハた御心ハふハれば狭衣ハ二十五ハ小思ハふ方別
あも有ハむを進ハ出ハて端無ハやハふハ宣ハはせてハふハふと
多ハうハの物ハを進ハむハとハふハ自進ハとハふハ比ハ皆同言ハして退
曾ハ流ハとハふハ須ハ流ハとハ○豈唯經津玉神獨爲丈夫而
云ハふハとハ此ハとハ同ハさハるハり

吾非丈夫者哉ハ其稜威雄走神の經津主神を奉る也
 給へる側より進出て申給へり御言を以て天神ハ
 奏せりしる可し借丈夫を麻須良表と訓む事六瑞
 珠盟約章第一一書ハ出て其事傳十六ハハ小己ハ注せ
 るが如し此の語勢神武天皇戊午年御紀ハ時五瀬命
 矢瘡痛甚乃撫劔而雄詰之曰慨哉大丈夫被傷於虜
 將不報而死耶と有ハ似たり自丈夫と云ハ物ハ慷慨
 心時又人の上を舉る時ハ小多く云語るを思ふ可し故佛足石哥ハ麻須
 良乎乃須ハ美佐岐多知布賣留阿止乎美都志乃波
 年多太子阿布麻豆尔麻佐尔阿布麻豆尔又麻須良乎乃布美於

禰留阿止波伊波乃字閑尔伊麻毛乃己礼利美都志
 乃霸止奈賀久志と有る麻須良乎ハ釋迦を云るなり彼
 ハ丈夫と云べし者ハ非れども石上ハ足跡を殘せ
 るを以て称るなり若て其下ハ乎避奈伎夜和礼尔於止
 礼留比止乎於於保美云と有る拙劣ハ對ハせたり
 古事記白檮原宮殿歌ハ阿米都知杼理麻斯登と
 有ハ天地千人益人みく大久米命の當昔武男の事共
 世ハ比類非りけれハ益人と云る少く丈夫と云ハ趣
 異る者あり一條大閤御説ハ孟子曰富貴不能
淫貧賤不能移威武不能屈此之謂
大丈夫是也と注せ給へハ字義ハ就てハ辨ふ可
古の大久米命と詠るも其意味相似たる事少く俗ハ

此字鏡集の位
 第五一書の有
 靈異之感
 有小並へて有
 起倫之氣
 有氣是ふ
 諸伊伎那志
 の例ハ

一人當十の雄
 者云カ如一○辞氣をバ金澤本小伊伎那志と訓る
小從ふ可一遊仙窟小氣調如兄又ハ機關大雅妙多ど
 有て人の氣勢を云々リ蜻蛉日記下中五小盆の事の
 風多ど様ハ小歎く入レの伊伎那志を聞レ哀れハ在
 小玉蔓四小今三條大貳を侮フハ一く思
 ひけテ況テ監ガ伊伎那志氣ハ一思出るも忘レと
 事限無一唐物語小楊家の女と得給ひてけり其形秋
 月の山端より高く升る心ちりて其伊伎那志ハ夏池
 小紅の蓮の初めを開けタカハヤと見ゆるも有リ
 借右の玉蔓卷るもを一本小伊伎那志一氣ハひ云く

と有り其言ハ若菜上二小故院の御時小太后の坊
 の初の女御少伊伎那志給ひトハ無下の末小参
 給ひ一入道宮小暫時ハ押レ給ひトハ徒然草五
 段小上人ハ猶伊伎那志何と云ハ非修非學の男云
 息を卷くと云ガ如一其ハ怒る時の事多と此ハ厲
 む時の事多故ハ氣の差ヲと云義多可一諸此小
 伊伎那志と云ハ石四百六獲速日神の所小注ルガ如
 小美迦と云ハ真氣ハ其氣の内小溢ルと云ハ伊
 迦ハ弥氣ハ其氣の盛ハ成ル義多故其神氣の内

谷重遠説小
慷慨有所感
激也と有り實
小然る言ふり

小亮る時ハ自然其氣外小進む故此と伊佐年とハ云
ふり即氣進イサムの義あり又其氣外を覆ふ計ありと伊佐
保比と云ひ又自其氣ハひを言ふも色ハも差呈ハす
を伊佐邪志とハ云ふありけり右ハ金澤本の訓ハ依
氣をハ其許登波伊佐邪志と訓り通證今本ハ其辭
注言語色氣也と云れバ俗ハ人の口氣を考へて許登
婆伊氣と云小當れら然れども此ハ唯ハ其神の氣
勢を云ふれハ許登婆ハ云ずして有るも私記ハ
氣慄慷慨を伊佐波介之と有れバ右の○慷慨ハ私記
辭氣をハ許登婆伊佐と訓たりハ云ずして有るも私記ハ
小波介之と有り皇極天皇四年御紀賊臣入鹿を誅給
ふ所小中臣鎌子連嘖而使勸と有ハ人をもして勵ハ云
むありと此ハ自勵と給へるありハ云ずして有るも私記ハ帝末十三小唐國

の劇ハ云ずして有るも私記ハ獸の形空蟬三十四小雪俄小降乱れ風ふと烈
しけれバ御遊ハ云ずして有るも私記ハび疾く止め末摘三十三小雪搔垂れ甚小
う降けり空の氣ハ云ずして有るも私記ハ烈ハ云ずして有るも私記ハう風吹荒れてる諸書小
多りりけれバ擧ハ云ずして有るも私記ハる小違非ず此ハ先小經津主神を大
丈夫と爲て抽出させ給へるを見て吾ハ大丈夫小非
びるのやと進出させ給へる氣調の尋常ありけり
と云るの字鏡集小崎を波宜志と訓り又宇都波夜志
と云訓有ハ一速ハ云ずして有るも私記ハと云小同一義ありと思ふ可ハ云ずして有るも私記ハ
小慷慨出文選善註壯士不得志也と有り口訣小慷不
得志也ハ云ずして有るも私記ハ慷慨大息也と有り石より出た可ハ云ずして有るも私記ハ
廣韻慷慨
竭誠也ハ云ずして有るも私記ハ○即配經津主神今平葦原中國と云ハ配字
注せり

曾倍氏と訓り入澤本小副字を傍書小爲るも其訓を
注したる者あり右四百三十三小注セらる如く經津主神
を大將軍と一此神を副將軍と一被遣取計しあり然る
小出雲神賀詞小ハ天穗日命の申給へる小己命兒天
夷鳥命亦布都怒志命平副天降遣天荒留神等平撥
平氣國作之大神平媚鎮天と有を見れば天夷鳥命ハ
大將軍平一經津主神ハ副將軍ハ當る如くみれど
も其天夷鳥命の任ハ上百十小注る狀少く此神ハ先
小御父天穗日命と共に國形見小降小を御在小坐小て
大己貴神を媚和小給へる縁を以て先導小爲て令

降給へれば征伐の事ハ係りせ給はざりけり故其
少ても經津主神ハ大將軍の狀あり古事記の趣ハ小
天鳥船神副建御雷神而遣と有て天鳥船命を建御雷
神小副て遣はされし物なり其神ハ大國主神小國を
避しめ奉る方小のを係りて國土の荒振神を言向さ
せ給へる事ハ見えざりけり者をや谷重遠説小以天
産靈尊爲相而擇使三四而始得二神得久之難可見照太神爲君高皇
之始ハ始ハの次第小其の謂ハ有て此小至れり
事を知ざる生賢ハ足ハず○古事記小ハ故尔使天迦久神
問天尾羽張神之時答自恐之仕奉然於此道者僕子建
御雷神可遣乃貢進と有て其ハ天尾羽張神の趣け

給へりあり此ハ此神進曰豈唯經津主神獨爲丈夫
而吾非丈夫者哉其辭氣慷慨と有て自進出させ給
へり少く稜威雄走神ハ問かせ給へり事の無きハ此
ハ本ハ古事記と同傳ありつゝ古書に記せる
こと可惜しと事ありけれ其右委曲なる由ハ右四百三十五
ハ已ハ注せるハ此ハ右ハ抄出たる文ハ依て少ク説
をハ爲べきあり其恐之仕奉ハ記傳十四ハ恐之ハ
加志許志ハ訓ハ如此言て即仰を羨り諾め辭
ハ成あり今世ハ畏あり申たと云も是ハ出たり
と云れたり予ハ説ハ傳廿三ハ例を與て委せ

注せるを中昔ハも多く此辭を用ひたり續後紀一七
宣命ハ皇太子止成利因畏利貴比云空穗祭使四十
ハ博士等畏より侍ハ藏開上ハ十七ハ御返ハ畏
ありて羨りぬ又五十五北方大宮の御返ハ聞え給ハ畏
ありて羨りぬ竹取物語十一ハ翁畏ありて御返事申
すやう枕草命二五ハ文詞無礼と人ころ甚く悪くけ
れ云々然るまじと人の許ハ余り畏ありたりと惡り
事ハ源氏夕白四ハ又無き事ハ畏あり浮舟ハ葵ハ
御供の人ハ打畏あり心ハ有つて渡りを浮舟十
可ハ我云む事ハ謀りてむやと宜ハ畏あり侍ハ

△後拾遺夏
公の御畏し
あて山寺小侍
けり

ふと云ハ此の恐之小同ト又繼体天皇十年御紀ハ謝
字を訓可竹川三十一小然すケ小辱る思え「畏まり
小若紫廿六小態と斯く御父有を僧都も畏まり聞え
給ふ又三十一甚ムツク一げ小侍れも畏まりをなめり
ふむ又三十一斯く問ハせ給へる畏まりハ此世ありて
も聞えさむむ此等ハ皆謝ふ心ありゆめし本
より此と異あり或説ハ畏まりハ本の心ハ恐る
意より轉りたるあり一ハ恐る
い恐れ入るり二ハ敬より心三ハ謝ふ事ハ云
ひ四ハ懈怠の誤り無沙汰の云分けの意五ハ勤
當の心ありと云り其勤當の心ありハ須磨小源氏の
光君ころ公の御畏ありて須磨の浦小物一給ふ
公詞花雜上小公の御畏ありて侍けるを僧正源覺
奏し許して侍けれハ其悦ひハ五月五日罷りて詠る

頭輔集小知くぬ事を人の申せり小依て白河院の御
畏まりあり頃云くと有るど公事小依て慎し居る
を云 仕奉ハ記傳十四五小都加閑麻都良年と訓玉事
あり雄略天皇十二年御紀歌ハ飲哀担滌尔柯抱俱都
柯陪麻都羅武推古天皇二十年御紀歌ハ訶之胡弥互
免伽陪摩都羅武鳥呂餓弥互と有り上なる人小事
る筋ハ萬の事を云あり都加閑ハ被使して君小使
ハ化奉るありと有が如し今其一二例を擧るむハ
古事記猿田毘古神段ハ乃悉追聚鱒廣物鱒挾物以問
言汝者天神御子仕奉耶之時諸魚皆仕奉白之中海鼠
不自又白擣原宮段ハ乘龜甲為釣竿打羽舉來人遇于

速吸門略又問汝者知海道乎答曰能知又問從而仕奉
乎答曰仕奉と有と始とて甚多く見んたり記傳小
然れば使と事と漢字ハ別異ふれども下を使ふと上ハ
被使ると云狀の異れるのこゝして言の本ハ一あり諸
都加閉奉と中昔よりハ都加字奉と云ひ又其字を年
小轉して都加年奉と云ひ又其年を略して都加麻都
留と云り如此言の轉れるのこゝあらず漸小轉り來て
今ハ都加麻都留と都加閉麻都流とハ甚く別して同
言とし聞えぬが如く成りゆと云れたり又率率と云も
可く主るまハ仕長執ある可く遣と云ハ使走の意
あり可くして本ハ其同言ハ出たり者と所見たり

此道ハ記傳小葦原中國小行く事を云ふ凡て物へ行
く事を指し道と云る事万葉六二十丁天平四年天皇賜
酒於節度使卿等御歌小大夫之去跡云道曾凡可尔念
而行勿大夫之伴と詠せ給ひ古今集小入遣の道あり
かく小と云る類哥小詞小多在り漢文小此行ふ
と云ふ行字小當れゆと云れたるハ然る言あるが予
が思ふ所ハ其とハ別あり此稜威雄走神ハ一も伊弉
諾大神の火神を斬らせ御在り坐むと爲させ給ふ御
怒小依て成出させ御在り坐けらる即十握劍と成り
て火神を思ふまが如く斬給へりけり小其血の劍鐔

劔鋒ツルの重落れるが天安河の五百箇磐石小激越て
經津主神武甕槌神の各祖神とも成出させ御在
坐けるが其般裂神根裂神ハも般名を裂衣ハ樹を裂り
せ給ふ由りて劔神り渡りせ給ひハ其子般ハ箇男神般
箇女神も謂ゆる石槌の神も由りて同トく劔神小
て御在一坐一其子經津主神ハも物を斬る事を
主しせ給ひ又戈を以て物を貫前く神り御在一坐
て劔ハ利ハを知す神小坐る事右小條小注セるが
如く又甕速日神と申すハ嚴く速き劔神と申す義ハ
少ハ燖速日神と申すハ火の速く走り燒が如く利ハ劔

神と申す御名あり武甕槌神と申すハ健く嚴く劔神
と申す事少物を斬断つ事を主しせ御在一坐す由
りて此經津主神と武甕槌神と何れの流るも劔小
因りて給ハごる神ハ一柱だ御在一坐すと雖も其
本を推究め以て行く時ハ唯此天尾羽張神一神の神威
小因て成出させ給へりけり此を以て思兼神及諸神
の考選ハも此神を抽出て申されけむ事右四百三小
注セる趣を以て見奉り知べきあり然れバ此小於て
葦原中國を御言向ハ始小先此神小ころハ大御命
仰給へるありけれ然る小此神より經津主神武甕槌

神ハ各器ニ爲て用ひさせ給ふ可き道有故小進
め申されし者と見ゆれば此ハ稜威雄走神の於此道
者と申給へるハ葦原中國小降りて殘賊強暴横惡之
神を征伐し事向る事を指て申させ給へるハ唯小
其國を指て道と申給へるハ非ず其國少し行給ふ
可き事業を指て道とハ申させ給へるありけり又右
古事記水垣宮段小東方十二道と有ハ東方十二國と
云小同トク孝徳天皇大化二年御紀小東方八道と有
ハ東方八國と云小異る又東海道東山道の如き
ハ更あり道口道中道後と云ハ京畿より四方小至る
道路を以て云所小ハ在れども其道路を以て定むる
ハ皇京より各其任小就て令起る小起れる由傳十六
卷四十九丁十八卷九十三丁小注る如く其ハ其も
國宰の任國小赴きて治るが即道なる謂ふを思

ハ可儲諸の事業を指て道と云ハ八洲起元章第五二
書小遂將合交而不知其術時有鶴鴿飛來搖其首尾二
神見而學之即得交道と有を始として四神出生章第
十一二書小又口裏念虫便得抽絲自此始有養蠶之道
焉と見え又俗小午書（書）文讀事ハ更あり凡て人の
事業の上小於て某道ナニニナクシテ某道と云事の今古共小多在る
共ハ佐知と云事小似り其ハ傳二十九丁三十四百
丁小己小注るが如く海宮遊行章小兄火闌降命自有
海幸弟彦火火出見尊自有山幸と見えたる幸サテして神
隨シテて稟賦たる俗小謂ゆる得手の事有を云あり

假令ハ年書く事得ハ有リ書讀む事得ハ有リ其年書く中ハ各持前ト云事有ク漢様を能爲ルも有リ和様を能書ル有リ又書讀む中ハ漢籍ハ長ク者有リ和書ハ曉ク者有ク如ク其性ハ得テ成シ行ハ中ハ各刻ク有テ一途ハ定む可ク入各其一を得テ終身の事業ト爲ル事ナシテ各其業を成シ遂ル上ハ於テハ父此ト子ハ授ク可ク子此ト父ハ受ベルハ妙處有ル至ル是我ハ在ル所ハ非ズ人ハ在ル所ハ我ハ非ズ其事を其人ト限ル如ク有ル故ハ幸ト云テ實ハ狹道ノ謂ル然レテ

其成シ行ハ事業の上ヨリ云時ハ道ハ年書く事業を以テ世を渡リ書讀む事業を以テ身を營フ故ハ他ヨリハ此を道ノ人ト云ハ我ヨリハ此を道を行ふト云ルが依知ハ性ハ就テ狹キを美知ハ業ハ就テ廣クと称ス者アリけり然レバ此ハ稜威雄走神ノ此道ト申給へルハ武事の上を指給へル其經津主神ト武甕槌神を並べて奉ル給へル片方ハ戈ハ片方ハ劔ハ其持別テ仕奉ル可ク道有ルを以テ事右ハ注セ事共ハ合セ思フ可ク者アリ是皇祖天神ノ産靈を以テ世中ハ人類を生出シ給

高野
中央庫

圖書
文庫

へる小人小各別ふる幸を賜ひ任して其道を令成給
ふ天機の微妙ふる御旨あり忽卒ふ心得べくくず如
此くく其人毎の事業格別ありと雖も其本を推究
むる時ハ古事記國生段ハ於是天神諸命以詔伊邪那
岐命伊邪那美命二柱神修理固成是多陀用幣流之國
賜天沼矛而言依賜也と云ふ御旨小約りて孝徳天皇
二年御紀小謂ゆる惟神謂神道隨而亦自有神道也と見
えたる神道ハ天神御子の天下万国を統御めさ
せ御在り坐す天地の大道是なり其事共ハ甚ハ幽深
て初て天下の道の道たる所以を且致有り予此を得
るを己小傳七卷小注せらるを初て事の條小云事

